

探訪 北の風景 74

昆布七湯 湯巡りの旅 後志管内蘭越町、ニセコ町

青木和弘

いまから89年前に鉄道省が出版した『温泉案内』（1931年刊）が手元にある。北海道のページをめくるとニセコの「昆布（こんぶ）七湯」が紹介され、その当時から、ここが「スキートの地」であることが知られていたことがわかる。

実はこの「昆布七湯」、現在の昆布温泉郷とは少し違う。ニセコ山系のアンヌプリとチセヌプリに挟まれた4つの温泉地のことなのだ。

4つの温泉地を標高の高い順に紹介すると、①ニセコ五色（標高750メートル）②湯本（同560メートル）③昆布（同300メートル）④ニセコ薬師（同200メートル）である。昆布には独自の源泉を持つ3軒、薬師に同じく2軒あつて

合計7湯だった。ただし薬師の2軒はすでになく、いまそこで営業する施設はない。そこでJR昆布駅のそばにある「昆布川温泉幽泉閣」（同50メートル）を加えて4つの温泉地をたどる湯巡りを紹介しようと思う。泉質がはつきり違うので面白いはずだ。

ニセコのような火山地帯の温泉水は、雨や雪が地層の割れ目から地中に染み込んで、マグマの熱に熱せられた岩の成分やマグマから発生する火山ガスを溶かし込んで湧出する。噴火口に近い、標高の高いところほど、成分が濃くて酸っぱい。ところが山を下るに従って地下水などで中和され、地層の成分も変わるから、だんだんアルカリ性へと変化していく。当然、色にもお湯の肌触りも大きく違う湯になる。

さっそく、昆布七湯の湯巡りに出発しよう。札幌市中心部から「ニセコ道の駅ビュープラザ」まで、車だと、中山峠を越えるルートで2時間弱だ。ニセコ道の駅のお目当ては「ニセコビール」と今夜のつまみ類を調達すること。

そして湯巡りの最初は、昆布温泉「ニセコグラインドホテル」（ニセコ町）だ。泉質は2種類あつて、いずれもナトリウム―塩化物・炭酸水素塩泉。酸性度は中性だ。1号井戸は鉄成分が多いので「鉄泉」と呼び、2号井戸は「ナトリウム泉」と呼んでいる。湯船の湯は鉄分で少し茶色をおびている。大きな庭園露天風呂が有名で、混浴だが女性は1



羊蹄山（標高1,898m）はニセコのシンボルである。向かい合う山、アンヌプリに多くのスキー場があつて、外国人観光客でにぎわうが、その眺望に、極めて日本的なこの山の姿があることは、リゾート地としての大きな魅力に違いない

〇〇円で浴衣を貸してもらえ。女性専用の露天風呂もある。

二湯目は湯本温泉「雪秩父」（蘭越町、旧国民宿舎）。温泉情緒を誘う硫化水素臭のある乳灰色の濁り湯で、泉質は単純泉（硫化水素型）。女性の露天風呂にはドロパックができる泥の湯がある。湯はPH3.9の弱酸性である。

この日の宿は「ニセコ五色温泉旅館」（ニセコ町）を選んだ。湯の成分が多彩で、泉質は酸性・含硫黄―マグネシウム・ナトリウム・カルシウム―硫酸塩・塩化物泉（硫化水素型）と長くなる。無色透明な湯がだんだん茶色をおび、白濁して青にも変化する。だから五色温泉と名付けられたという。PHは2.35で、源泉を口に含むと酸っぱくて苦





湯本温泉の源泉は大湯沼から引く。発見された1885年（明治18年）当時には間欠泉があったが硫黄採掘でなくなったという。チセヌプリの登山客や山スキーの愛好者がよく訪れた宿「チセハウス」がこの近くにあった

冬のニセコ五色温泉旅館。1930年開湯で、冬はスキー、夏は登山や避暑に訪れる人々で賑わう。湯も絶品である



昆布川温泉の幽泉閣。湯本温泉の雪杖父とともに、蘭越町交流促進センターとして同町の第3セクターが運営している

い。露天風呂は雪壁に囲まれた冬もいいし、爽やかな夏の朝もいい。
翌日は、季節がよければイワオヌプリのお花畑巡りなど周辺の観光を楽しみ、それから「昆布川温泉幽泉閣」（蘭越町）のツルンツルンの湯に入ってみよう。泉質はナトリウム―塩化物・炭酸水素塩泉で、旧泉名だと重曹食塩泉になる。PHは8.2という弱アルカリ性だ。標高を700メートルほど下り、火口から直線距離で約9キロメートル遠ざかると、泉質はこれだけ変化する。
なぜか温泉に入るとお腹がすくものだ。帰りは蘭越町内にある「街の茶屋ほん田」（蘭越町130番地、電話0136・57・5239）で蘭越米のお握りをおやつ代わりにいただいた。おいしかった。